

第11回分子予防環境医学研究会を主催して

衛生学 大槻剛巳

列島全体をこの冬一番の寒波が襲った2012年1月27～28日、川崎医科大学同窓会からの助成を受け、倉敷市民会館2階大会議室にて第11回分子予防環境医学研究会を主催いたしました。

この研究会はその開設主旨から抜粋しますと「既存の社会医学系学会は十分な対応がとりきれておらず、若い世代の結集と育成が十分にできていない。ここに、新しい研究会組織を組織し、分子予防医学研究の交流、研究/教育の方向、若手研究者の育成、学会組織のあり方などについて率直な意見交換を行うことは危急の課題と考え、分子予防環境医学研究会を設立した。」というものであります。

IL-8を発見された東京大学分子予防教室の松島教授やRbを発見された京都府立医大の酒井教授、最近ではもやもや病の責任遺伝子の発見をされた京都大学の小泉教授などが中心メンバーとなっておられて、大槻も第2回研究会から参加し、今回会長を務めることを仰せつかりました。

今回のポスターを紹介します。

テーマには「春告鳥の啼く頃には…一分子予防環境医学の明日を見つめて—」としました。明日を見つめているような写真をポスターに使ったので、決めたテーマです。

特別講演では、岡山大学泌尿器科の公文教授に『固形がんに対する遺伝子治療の最前線「REIC遺伝子医薬を中心として」』というタイトルで実施していただきました。この研究会は元来は予防医学・衛生・公衆衛生・健康科学という分野の研究者の集まりなのですが、だからこそ普段聞けない臨床治療の先端である遺伝子治療の話と考えたのです。ここ3年ほど、大槻が大学内で産学官連携の担当をしていることで、県内の種々の研究会において、公文教授と親しくなる機会を得ていたこともあって、ご依頼した次第でした。実際のご講演では本邦における遺伝子治療の歴史から始まって、現在、臨床試験を展開されている岡

第11回分子予防環境医学研究会

テーマ：春告鳥の啼く頃には…
一分子予防環境医学の明日を見つめて—

日程：2012(平成24)年1月27日(金)～28日(土)
会場：倉敷市民会館2F大会議室
会長：川崎医科大学 衛生学 大槻剛巳

プログラム

1) 特別講演:固形がんに対する遺伝子治療の最前線「REIC遺伝子医薬を中心として」
岡山大学泌尿器科 公文 裕巳 教授

2) シンポジウム:「DNA損傷への応答メカニズムと疾患」
京都大学 放射線生物研究センター 高田 穰 教授
国立がん研究センター研究所 ゲノム生物学研究分野 河野 隆志 分野長
茨城大学理学部 田内 広 教授

3) 一般演説

URL: <http://www.kawasaki-u.ac.jp/jungem11/>



主催
倉敷市民会館 大槻剛巳
〒713-0292
倉敷市本町11番 101
TEL: 086-425-5050
FAX: 086-425-5642
URL: <http://www.kawasaki-u.ac.jp/~kai/kyushu/>

協賛
〒713-0292
倉敷市本町11
岡山大学 衛生学
TEL: 086-462-1110(内線7150)
FAX: 086-464-1123
E-mail: jungem11@kai.kawasaki-u.ac.jp

特別講演：岡山大学 公文教授



山大学の発見によるREICという遺伝子による前立腺癌の治療についても言及していただきました。実験的に癌細胞の死滅とともに、生体の有する抗腫瘍免疫の賦活化といった側面にも言及され、これは癌の治療のみならず予防においても、癌細胞を早期に死滅させる手段の構築、あるいは生体の免疫力の検討からの癌予防にとっても非常に有用な講演となりました。

京都大学放射線生物研究センター高田教

シンポジウム：京都大学 高田教授
茨城大学 田内教授，国立がん研究センター研究所 河野研究分野長



授・茨城大学理学部田内教授，国立がん研究センター研究所河野分野長によるシンポジウム（DNA損傷への応答メカニズムと疾患），さらに一般演題30題が発表され，熱心な討議が行われました。高田先生は，2000～2006年，川崎医科大学の免疫学の教授をお務めで，現在京都大学にいらっしゃいます。今回主催することもあって，やはり特別講演同様，普段は聞けない話を，それに高田先生がテーマとされているDNA傷害と

その修復というのは放射線による生体影響にもつながり，時期的にも良いのではないかと考えて，昨年夏頃には，高田先生に連絡を取った次第でした。シンポジウムの「DNA損傷への応答メカニズムと疾患」については，ゲノムDNAの安定性が生命維持に必須であることから，特に放射線曝露などによって生じるその損傷と，それに対する生体反応系としての修復機構に関連する遺伝子群について，それぞれの演者がファンコニ・NBS1・そしてクロマチンリモデリングに関連する遺伝子について発癌なども含めた意義を紹介されました。これらの知識は，予防医学を分子レベルで考えるにあたって非常に貴重な講演であったと感じられました。

さらに一般演題についても，ダイオキシンやいわゆる環境ホルモン，さらには有機溶剤，アスベスト，ナノチューブなどの環境中の有害物質の生体影響について，神経系，発癌，免疫系等への影響について最先端の知見が紹介されました。また発癌の分子予防についての食品成分の利用についても，分子機序が明らかになってきていますし，生活習慣病と遺伝子多型では，広く生活習慣病全体について解析が進んでいる事実が明らかになり，より広範な観点からの分子疫学の必要性を感じさせられました。さらにもやもや病や神経変性症の責任遺伝子の同定は非常に貴重な発表となりました。

若干，予想した参加者よりも少なかったのですが，密度の濃い討論の充実した研究会になり，こういった領域のコアメンバーが集まって，それぞれの研究成果を紹介しながら予防医学の明日を目指すという分子予防環境医学研究会自体の主旨に合致した研究会であったと考えられました。

次年度以降も，本年度の発表をさらに進化させた研究が披露され，これによって種々の疾患に対しての分子機序を主体とした予防方策の展開が期待されるところです。

最後に抄録集の表紙を紹介して，項を終えたいと思います。

第11回 分子予防環境医学研究会

春吉鳥の啼く頃には…
—分子予防環境医学の明日を見つめて—

プログラム・抄録集



【会 期】 2012年1月27日(金)～28日(土)
【会 場】 倉敷市民会館2F大会議室
【会 長】 川崎医科大学 衛生学 大槻剛巳

会場の様子

